

「緩和ケアを考えて下さい」と主治医に告げられたのは 2016 年 12 月中旬のことでした。

2015 年 8 月に大腸全摘の手術はしたものの翌月には転移が判明、さらにその翌月より抗ガン剤治療が始まりました。

何度も入退院を繰り返す夫に当時小学一年生だった娘は手紙を書きました。娘は手紙を書くことを自分自身に課す宿題のようにほぼ毎日書いていました。「大好き」「さびしい」

「お父さんに会いたい」と言ったとても大切な想いを毎日伝えようとししました。夫はとても喜び娘の手紙が夫を支えたと思います。

抗ガン剤治療を始める時に余命一年と宣告された夫でしたが、娘のためにも必死で頑張りました。副作用で苦しむことも多くありましたが、それでも夫は頑張って現状を受け入れ必死で戦いました。

あっという間に 1 年は過ぎて行きましたが、夫の体には大きな変化はなく、それなりに元気に毎日を過ごしていました。それでもガン

は少しづつ夫の体を蝕んでいきました。

2016年10月には3つめの抗ガン剤投与が始まりましたがその効果も虚しく緩和ケアを考
える段階に突入しました。

緩和ケアを真剣に考えなくてはならない一
方で残された時間をどう過ごすかが私達夫婦
にとって大きな課題でした。私達にとって最
も大切な日である娘の誕生日の3月2日をど
う過ごすことができるか、夫がその日まで頑
張ることができるか、私は心配でした。

目に見えて少しづつ体調が悪化していく夫、
それでも食事を取ることができたので私はま
だ大丈夫、と自分に言い聞かせていました。
しかし2017年2月13日、突然嘔吐を繰り返し
救急車で運ばれ、そのまま入院することにな
りました。夫が家に帰ってくることは二度と
ないのだろう、と私は思いました。

入院後は日毎に病状が悪化していき、いつ
何があってもおかしくはない状況になり、夫
の実家や兄姉に会いに来ていただきました。

すっかりやせ細り嘔吐を繰り返す夫の姿に誰も言葉が失いました。

入院から10日ほどたったある日、病院へ着くと夫は眠っていたのか目をつぶっていました。これまでは話しかけるとはっきり応えてくれましたが、反応が鈍く「私のこと分かる？」と聞いても「分かるよ」とは応えてくれましたが、本当に私のことは分かっているのか、意識がはっきりしていないのかと思いました。このまま息を引き取っていくのではないかと思い、私は大泣きしました。声を出して激しく泣きました。しばらくの間泣き続けていると「どうしたの？」夫が聞いてきました。その声を聞いて夫の意識がまだはっきりしていること、夫の優しさがまだ残っていることが分かりました。しかし、もうすぐ8歳になる娘が夫のこの姿を見たらどう思うのだろうか。私でさえ驚いたのだから、娘はどれだけ驚き悲しい思いをするのだろうか。

翌日には娘も一緒に夫に会いに行きました。

娘は手紙を書き、夫は手紙のおかげか前日よりわずかですが体調は良さそうでした。

ほとんど話すことができなくなったお父さんを見て娘はショックを受けるかと思い心配しました。「こんなお父さん嫌い」と言ったらどうしよう、とばかり私は考えていました。それでも、多少の驚きはあったかもしれませんが娘は優しくお父さんに話しかけそばにいたがりました。家に帰ってからも「お父さんがとても心配」とばかり言いました。私は娘の優しさと強さを信じよう、信じて今もこれから生きていこう、と強く誓いました。

私はほとんど寝たきりになった夫の体を触ってみました。すっかりやせて骨だらけになった肩や背中、象のように浮腫んだ足、それでも握った手は出会った頃のままでの優しくて大きな手でした。

どんなにやせ細っても苦しんでも、最後の最後まで夫の姿をこの目に焼きつけておこう、と私は強く誓いました。

娘の誕生日に病室へ行くと壁がきれいに飾りつけられていました。看護師さんが忙しい中娘のためにして下さいました。娘も私も大喜びでした。夫は筆を持つのがやっとだったにもかかわらず、とても細かい字で娘にメッセージを書いてくれました。娘の名前は間違っ
て書いていたけれど「大好き」と書いたのが分かります。毎日伝えていて、これからもずっと伝えたい「大好き」の想いを夫は最後に残してくれました。

その5日後に夫は私が見守る中で静かに息を引き取りました。娘は二度と目を覚まさないお父さんに「お父さん、ありがとう」と優しく声をかけました。娘は告別式まで何枚も手紙を書き、夫はその手紙と一緒に天国へ旅立ちました。